

平和をめぐる、さまざまな視点から議論が繰り広げられた第4回宗門教学会議。(左から) 丘山願海、藤丸智雄、古賀茂明、小原克博、小林正弥、徳永一道、満井秀城各氏



宗教と平和

武器なき平和の可能性を探る

平和について宗門全体で学び、議論し、行動していくための資料「平和に関する論点整理」(中間報告)が昨年12月、本願寺派総合研究所によってまとめられた。12月16日にはこの論点整理をもとに第4回宗門教学会議「宗教と平和—武器なき平和の可能性」が伝道本部で開かれ、元経済産業省官僚の古賀茂明フォーラム4代表と小原克博同志社大学神学部教授が登壇、「白熱教室」で知られる小林正弥千葉大学大学院教授が進行した。ナショナリズムと宗教、憲法改正、集団的自衛権、仏教の社会性などの論点をめぐる議論のあらましを紹介する。

第4回宗門教学会議

問題点を整理し議論、新たな一歩に

ご門主お言葉

有識者の方のお話を通し、宗門と宗門人として、私たちの歩む道を考えていただきたいと思います。
宗祖親鸞聖人は、出家者のための教えとしてではなく、さまざまな仕事をもち、生活をする在家者へ浄土真宗のみ教えをお説きになりました。つまり、さまざまな課題や悩みを抱えている人の生きる依りどころとなるのが、浄土真宗のみ教えであります。み教えが多くの人の心に届くためには、教えの伝え方を私たちが工夫しなければなりません。
社会の問題は多面性を持ち、複雑化している場合が多くあります。単純に解決を図ることは難しく、そのことによつて他の問題を生み出す場合もあります。私たちに大切なのは、まず社会の問題に関心を持つこととあります。その上で多様な意見を聞き、考え続けることが重要です。そして私ができることをすることしか、解決方法はあります。
今日のお話を通して、テーマであります「宗教と平和—武器なき平和の可能性」について思索を深められ、宗門の歩みへとつながりますことを期待しております。(一部省略)

ご門主のお言葉(右)に続き、石上智康総長が「このたびの『平和に関する論点整理』では予断と偏見を排除し、平和に関する問題の所在をトータルとして整理し、宗門全体で学びが深まることを主眼としました。建設的な平和への取り組みの機縁となることを期待します」と挨拶した。

●登壇 ● 古賀氏

まず古賀氏が登壇。日本の政治状況に触れつつ、安保法案の成立などによって「非常にはっきりと平和主義をとっていた日本の外交政策が大きく転換された」という報道が、ほとんどの国でなされている」と指摘した。
「こんなに戦争の怖さがわかる時代はないのに、日常的なものになってしまった。人間は生き物であり自分を守るという本能があるから、それが拡大していくと、自分を守るための戦争もしかたないという論理につながる。しかも人間は不完全で必ず間違った認識をしてしまう。人間がいていいことと平和は来ないし、絶対的平和はないと思うが、それでも平和を求めていくというプロセスが平和主義」とし、「武力をなるべく使わないで平和への努力を続けることが本当の意味での平和主義ではないか。今の政府の考えは、積極的軍事主義にすぎないのではないか」と話した。

●登壇 ● 小原氏

小原氏はまず、宗教とナショナリズムについて語った。
「自己犠牲を正当化するための、あるいは死を美化するような論理が国家、宗教にも共通してあったのではない」と述べ、戦時教育の過ちについて「世俗的権威を積極的に正当化していく。みずからその一部になることで自己正当化を図っていく、自らの存続を図っていく道を選んだ。残念ながら、日本の宗教すべてに当てはまる」と指摘。さらに、「リベラルな知識人たちは時代の流れに簡単に迎合し、社会の変化に対応させながら自ら善き込まれていった。ドイツにおいても日本においても、自らの信念、信仰に忠実であった時に、時代がもつ魔法的な誘



古賀茂明氏

こが、しげあきフォーラム4代表、古賀政策ラボ代表、へいわフォーラム2015(御同朋の社会をめざす運動)東京教区委員会主催 講師



小原克博氏

こはら、かつひろ同志社大学神学部教授、同志社大学良心学研究所センター長、専門は宗教学、比較宗教学、キリスト教思想

引の力から逃れ出ることができた」と話した。
また、「利他心が国家のもとは不殺生ではなく暴力へと向かうのはなぜか」と問いかけた。「一人一人がただ自分のために生きるのではなく、人のために、自分が住んでいる社会のために、できれば自分が住んでいる国家のために生きたいという思いは素朴な感情として、だれもが持っているもの。しかし、こうした小さな良心も、いうものが大きな良心を生み出すのではなく、巨大な悪のメカニズムを生み出した」と語り、その典型的な例としてナチスドイツを挙げた。
その上で、「宗教というのはしばしば個人の心の問題、心の内面を扱うが、内面における平和だけを扱うが、内面における平和だけ

社会の問題に関心を持ち、多様な意見聞き、考え続ける

テーマ絞り 議論深める

テーマに踏み込んでいく形で小林氏が問題点を整理し、議論を深めた。

◆正しい情報

憲法改正について古賀氏は、「自衛隊ができるのは攻撃された時の反撃という解釈になっており、それはそのまま堅持すべきだ」と思っている。例えは「自衛のための軍隊を保持する」となれば、保持することが憲法上の要請となり、軍隊を持たなければならぬ、守るに足る強い軍隊でなければならぬ、という話になると危惧を示した。
その上で、人間の自由意志の大前提となるのは「正しい情報を得られているか」と指摘。「言論の弾圧は常に起きているが、メディアがそれに対抗するという姿勢を示してきた。しかし、政権側が圧力をかけた。国家が介入することによってマスコミが自衛、付帯するようになる。問題をあぶり出し議論を提起する、批判するということを狭めていく方向に自ら進んでいくことになり、マスコミは能力を失う。マスコミが機能



◆ナショナリズム

さらに小原氏は日本のナショナリズムについて言及。「愛国心と3・11との関係がよく指摘されてきた。絆という言葉に乗っかる形でさまざまなナショナリズムが出てきた。今も国家として危機に対応するという流れの中にあり、政治の右傾化とかその現状に対し、社会は結果として十分な批判力を発揮できなかった。逆に、保守系の政治家がこの状況を巧みに操作して利用した」と指摘。宗教との関係については、ナショナリズムに迎合した歴史の反省とともに、「国家に吸収されたり、道具化されなかったか」と問うことができる。問題点はナショナリズムを相対化するような明確なイデオロギーが日本社会には見当たらない」と話した。

◆宗教者の役割

宗教者の役割について古賀氏は「仏教者、宗教者としてできることは、国家というものを介さないで、門徒あるいは市民との関わりを深め、それを世界中に広げていくこと。一つの宗教あるいは宗派としての活動と、そういう活動を国際的に他の宗教、宗派と連帯していくことで戦争の歯止めを作れるのではない」と話した。

◆集団的自衛権

集団的自衛権について古賀氏は「すべての国が個別的自衛権しか行使しないと合意すれば、戦争は起らないはず。武器を持つことによって戦争が防がれている」と話すが、自衛の戦争ということとでいるんな問題が起きた。それ

が集団的自衛権ということで拡大すると、ますます危なくなる」と指摘。小原氏もそれに関連して、「西欧列強から中立的なスタンスを持っていった、少なくとも軍事的には持っていたはずの日本に対する見方が大きく変わった。中東をめぐる国際情勢の中で日本の安全保障は著しく危機的な状況を迎えている」と語った。
「宗教と平和—武器なき平和の可能性」が伝道本部で開かれ、元経済産業省官僚の古賀茂明フォーラム4代表と小原克博同志社大学神学部教授が登壇、「白熱教室」で知られる小林正弥千葉大学大学院教授が進行した。ナショナリズムと宗教、憲法改正、集団的自衛権、仏教の社会性などの論点をめぐる議論のあらましを紹介する。

平和に関する論点整理

宗門全体の平和への意識を高めると同時に、予断と偏見を排除し、具体的に関心を持ち、多様な意見を聞き、考え続けることが重要です。その上で多様な意見を聞き、考え続けることが重要です。そして私ができることをすることしか、解決方法はあります。
今日のお話を通して、テーマであります「宗教と平和—武器なき平和の可能性」について思索を深められ、宗門の歩みへとつながりますことを期待しております。(一部省略)

◆社会性と倫理性

こうした意見に対し、勸学寮頭徳永一道氏は「宗教者は社会の問題に口を出すな、仏教は守るというところで、江戸時代には宗門の教学は異端に弾圧された。明治政府もそれを利用した。真俗二諦的な発想は当たり前だと思いつつ、太平洋戦争にも協力した。それを反省したにもかかわらず、宗門にはいまだにその発想が残っている。浄土真宗の信仰は往生の問題であり、阿彌陀如来に救われていくということだが、宗祖が明らかにされた他力の信心というものは社会性というものを無視した私だけの救いの問題なのか」と指摘。総合研究所副所長の満井秀城氏は「正義というものを仏教では持たない。だから正義のための聖戦といふことはないが、真俗二諦という発想によってダブルスタンダードとなり、世俗権力の論理を暴走させてしまった」と話した。

◆国家を相対化する

仏教者の立場から満井氏は「武器を持ったから恐怖が生じたというのが仏教の立場。そういう意味では絶対的な平和を求めている」ということ。アメリカでも銃社会に対する反省は起きており、武器がない形を求める方向は共有されつつある」と話した。さらに、同研究所所長の丘山願海氏は「国家と結びつければ、宗教は必ずナショナリズムにつながってしまう。国家という価値観を相対化する原理が仏教にもあると思うし、それは『一切衆生』ということ。宗教者はある意味、国家を超えなければならぬ」と語り、その中に「心豊かに生きる」ということ。「自他ともに」というのは一切衆生。そのメッセージを仏教者は送る」と語った。

◆現状をつくるもの

また、同研究所副所長の藤丸智雄氏は「現状は少しずつ平和に近づいているという見方もある。理想的には個別的自衛権も集団的自衛権も認められないが、現状の平和をつくるというものという評価もある。ここからさらに進むために、心の中に平和をつくるという宗教的なアプローチが大きな力になり得るだろう。しかし、それは数十、数百のメニューの一つであり、これだけで極端に事態が変わるとは思えない。集団的自衛権は簡単に肯定できないが、論点整理でも分析したように、平和構築の歴史の中で評価すべきだ」と意見を述べた。